
運命の赤い糸

レイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の赤い糸

【Nコード】

N2316M

【作者名】

レイル

【あらすじ】

朝起きたら赤い糸がついていた

それは幼馴染のあいつと繋がっていて・・・

(前書き)

まえがき

余にも奇妙な物語でちょっとしたネタ程度に扱われてたのを思い出したので

なんか面白い短編でも作れないかなと思って書いてみた

朝起きると運命の赤い糸が見えました

いや、運命のかどうかは知らないけど赤い糸が左手の小指についてたうん、正直自分でもわけわからんしちよっと混乱してる

というか変ないたずらしたの誰だよ？とか考えても思い当たる人間がない

とりあえず糸を辿ってみると・・・

「・・・消えてる？」

部屋の壁にむかって伸びてる糸が自分の指先から1メートル程度のところで

空中に溶けるように途絶えていた

「とりあえず外そう、てかこれなんだろ・・・って外れない!？」

なんと外そうとするとその赤い糸は指をすり抜けて触れない

「いや、これで学校行ったらお前ナニソレって白い目で見られる・・・

・マジドウシヨ」

とかなんとか悩んでいると

「起きろー!」

と元気一杯な声で部屋のドアを開けてきた女がいた

「母さん朝からうるさいっ」

ここで女の幼馴染を想像した画面の前の君、ちよっと頭冷やそうか自分には確かに幼馴染はいるがアニメみたいな事なんて絶対に起きないんだからな!

朝起こしにくる幼馴染とか自分も高校入学の時にちよっと夢見たりしたよ?

でも幼馴染普通に自分スルーして学校いっちゃったからね?

高校初日の入学式で寝坊しちゃったからね!?

「初日から寝坊とは、毎朝起こしにいったってやろうか?ウチの母さんが起こしに行ってるやるとか言ってるけど」

「いや、遠慮します」

その日の挨拶はそんなでしたよ
まあ住んでる家が隣同士だから休日は一緒にゲームやったり
連休となるとお互いの家族一緒に1泊2日の温泉旅行なんかもした
りしてるが

お互い兄妹がいるせいでラブコメできねーぜっ！
と、話が反れた

まあ起こしにきたのは母さんだった

「これ母さんがやったの？」

と言いつつ左手を上げて赤い糸を見せるが

「何を？」

「いやだからこの赤い糸だよ」

「黄色い救急車呼んでやろうか？」

「ノーサンキュー」

「アホやってないでご飯食べな」

そんな事を言っただけで部屋を出て行く母

触れない糸・・・もしかしたらと思ったが見えてなかったか

というか母さんがこんな手の込んだイタズラをするとは思えない

とりあえず母には見えていない事がわかった、ご飯食べよう

「お早うバカ兄」

「・・・お早う」

ちなみにウチの家族構成は両親と妹と俺の4人家族、妹は2個下で
口が減らない

ちなみに妹は最近腐り始めた、家族で共有してるPCの画像フォル
ダ見たら拒絶反応MAXだった

見た目普通なんだがなあ・・・

まあそんなこんだで取り留めのない話をTVのニュース横目に朝食
を食っていく

「あ、そうだこれあの子に渡してくれないかしら」

と俺に一冊のノートを差し出す母さん、幼馴染は料理好きなんだが
ウチの母の作るお菓子を気に入って自分で作りたいらしく

母さんの「お菓子製作ノート」を見たいと言っていたが、それか

「わかった、学校ついたら渡しておく」

「中身は見ちゃダメよ？」

「ヘイヘイ、んじやいってきます」

「いってらっしゃい」

「帰ってくるなよ」

お前は学校どうした・・・

「創立記念日」

そういやそうだったな、てか人の心読んだ！？

「フヒヒ」

きめえ

「・・・」

受け取ったノートを鞆に仕舞い、家を出て学校へ向かいつつこの糸
について考える

妹の反応からしてやはり見えてはいないようだったし、周りを歩く

人たちも不自然に途絶えてる糸を見る様子はない

それと糸がくっついてるのは自分だけのようだ

ちなみに糸は自分の歩く先にむかって伸びていて、その先を視線で

追っていくと

思わず脚がとまってしまった

さっきまで途中で消えていた糸がずっと伸びている

というか、自分の左手の小指から伸びた糸がその人の左手の小指に

繋がっている

というか、糸繋がってるの幼馴染だった

「・・・え？」

いや、もしかしてとは思ったけど、これって運命の赤い糸的な物な
のか？

いや、まだそうとは限らない、もしかしたら俺はいつのまにやら麻

薬的な何かをやっている幻覚が見えているだけなのかもしれない
いやでも麻薬を使った覚えなんてないぞ
とか混乱してしまった

「とりあえず、あちらさんの反応で対応を変えよう」
もし見えていたら相談してみるし、見えていないのならそのときは
そのときで考えよう

そう考え、止めていた足を動かして歩き出して、学校へ向かう俺で
あった

幼馴染の席は窓際一番後ろで俺の席は廊下側一番後ろである
教室の端から端であるため視線が合う事はないが、昼食の際はクラ
スメイトと一緒に学食でご飯を食べたりと

幼馴染で友人な関係だ、恋愛対照になるかといえれば自分自身好奇心
から幼馴染が恋人になればあと考える程度だ

恋人が欲しいわけではないが、周りにも恋人というよりは親友な関
係のヤツが多いため、あまり気にしていない

それはおそらくあいつも同じだろうと思う

授業中赤い糸は俺とあいつの間の生徒を貫通してあいつの小指に繋
がっていた

あと試しにハサミで切ってみようとしたがすり抜けた
そしてあいつには見えていない様子

昼食のとき一緒にメシ食ったがそれらしい反応はない
というか俺が挙動不審になってたらしくなんか心配された
そんなこんで、放課後

「あ、一緒に帰るか？」

「ごめん、この後ちょっと用事あるから帰ってて」

一緒に帰るか誘ったが断られた、そういや昼飯の時担任に何か呼
ばれてたがあれかな？

この赤い糸の事ごまかしつつ話してみようかと思ったんだが、明日
でいいか

「うい、んじやまた明日な」

教室で別れて校門のどこまで来て、思い出した

「あ、ノート渡してないや」

今朝母から預かったノートの存在を忘れていた

とりあえず探しにいくが

「用事ってどこだ？職員室？」

いつものクセで頭を掻いて、手を下ろしたとき左手の赤い糸が目についた

「あ、コレ辿ってけば早いな」

いる方向を探すのにはちょうどいい、角度的に1階か？方向的には・・・図書館かね？

校門から戻り、糸の向きに従って図書館を目指す

ウチの図書館は本が本棚に入っていないで本棚の側に積んである箇所がたくさんある

元々部屋が狭いからなんだが棚を増やすつもりはないようだからで図書館に入ると

「あ、ほんとにいた」

「あれ？帰ったんじゃないの？」

「いや、私損ねた物あってさ、それ渡しに来た」

幼馴染は背の高い本棚用のはしごに登って本を抱えていた
背表紙にはこの地区の歴史みたいな事がかいてある

「おっなんかすまんね、ちょいまってつと・・・うわあ！」

話しつつ近づいていったら、幼馴染が降ってきた・・・

「へブシッ！！」

あいつが後ろから俺の腹に、あと本が頭の上にゴンって当たった

「いたあ、ごめん！大丈夫！？」

いや・・・腹が潰れてっつか落ちてきたせいだと思うがむっちゃいてえ

後頭部が俺の鼻に当たるし、そしてはやくどいてくれ

「重い・・・」

しまった思わず本音が

「ねえ重い？ 私重い？ ねえねえ」

「がっふっんぐっゴメ、かる、軽いから、どいぐっ」
腹の上で跳ねやがったコイツ！

「ごめん、大丈夫？」

「ハァーハァー・・・死にそう・・・」

息絶え絶えに体を起こして返事する

一応心配してくれてる事に安心

息を整えて立ち上がる、まだ腹がいたい

「ごめん、頭ぶつけてない？」

「小6まで空手やってたおかげで後頭部は無事だよ」

顔面強打したが

「よかった、元々悪い頭がもっと悪くなったらどうしようかと」

「てめえ心配してるのかバカにしてるのかどっちなんだ」

言っておくが俺のテストはいつも中の下だ、バカではない

「ほんとごめん、気をつけるよ」

「まあいいかえっと、なんだっけ？」

「えと、何かを渡しに来たとか言ってたっけ？」

「あ、それだ、えーとホレコイツ」

鞆からノートを出して渡す

「このノート！」

「なんか貸してやるってさ、うちの母が」

「わーやった！ ありがとうって伝えといってくれる？」

「ああ、わかったんじゃ俺は帰るけど気をつけるよ、あのとき俺いなかったらたぶんお前後頭部打ってたと思うし」

あの状況はしっかり顎引いて力込めないとマジで俺も後頭部打ちそうだった、主にあいつの後頭部の影響だが

「ちよっと待って、これ借りたらもう帰るから」

「ん、用事はもういいのか？」

「うん、今度の文化祭でクラス展示するやつをおおまかでいいから

考えておいてくれないかってだけだから」

「そういやお前文化祭実行委員だったな、故郷の・・・ナントカってやつか」

「故郷の歴史と文化ね、こっちはやる事決まってるけど展示物何にするか決めないとだから」

「そういやあと一ヶ月で文化祭か、今年はクラス行事何やるんだろうか、去年は喫茶店やってたが・・・」

「そか、んじゃ一緒に選ばうぜ」

「お、賛成♪」

その後は本を借りて学校を出て一緒に家に帰りながら雑談していたが

「そういえばなんで私が図書室にいるってわかったの」

「こう質問され、おそらくは疲れていたのだからこう返してしまった

「ああ、赤い糸を辿ったからな、すぐわかった」

「・・・ぷっくく・・・はっ・・・くっ・・・くさっってかはずかしいよ!」

腹を抱えて笑われてはつとなる

「さて!今のナシ、間違えた!いや間違えてないんだけど間違えた!あれ!なんでこうなった!」

そしてパニくる俺と笑いを堪えようと奮闘する幼馴染

「いや、今のは予想外すぎて笑った」

「いや間違ってないけど間違ってる!誤解だ!でも糸は・・・じゃなくて!」

「いいよ、付き合っただけ」

「だから誤解と・・・え?なんですと?」

イマナントイイマシタ?

「だから、恋人になろうって言ったのよ、今のって思わず本音が出ちゃったんでしょ?」

「・・・」

「私もあなたの事が好きだし、あなたもそうなんでしょう？」

まあ確かに好奇心からの恋心みたいなのはありますが・・・そんなあっさりOK？

そして瞬速で自分の気持ちを考え直してみると

「まあそんな所かしらんね」

「はっきりしないね、それだったら恋人にはならないよ？」

「いや、言い直す」

自分の中にはこいつに恋人になってほしいと願う自分が確かにいてOK出されたとたんにこいつに惚れているのを自覚してしまっただからきちんと言い直そう

一度目を閉じ一息吸い込んで

「恋人になってください」

「よろこんで♪」

今までは幼馴染の友人だったが

これからは幼馴染の恋人になっていく俺たちの関係

きっかけを作ってくれたこの赤い糸はまだ見えている

糸がなくなったら分かれてしまうかもしれないという漠然とした不安はあるが

もし糸がなくなっても恋人同士でいられるように互いに信頼し合えるようにしていこう

今日の帰り道はいつもより夕日がまぶしく感じられた

—Fin—

(後書き)

あとがき

ひさびさに小説執筆です

まえがきにも書いてますが世にも奇妙な物語に赤い糸というタイトルで

男が運命の女性に会うためになんかやってる話があったのでそれを思い出したらふとこんな感じのが思い浮かんだ

執筆時間2時間か

考えながら打ってたから時間かかった気がする

次の執筆はいつになるかね

面白かったら感想書いてくれると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2316m/>

運命の赤い糸

2010年10月28日07時59分発行